The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	公衆衛生に国境はない : Beyond SDGsとしてのプラネタリーヘルス
Author(s)	島津, 美寿季
Citation	目で見るWHO. 2024, 88, p. 8-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97180
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

公衆衛生に国境はない Beyond SDGsとしてのプラネタリーヘルス

大阪国際がんセンターがん対策センター

島津　美寿季

大阪大学医学部在学中にタンザニアへ渡航し、国際保健医療と出会った。健康格差是正を夢に、大学院で疫学・公衆衛生を勉強中。

概要

2023 年 10 月 31 日から 11 月 2 日にかけて、茨城県つくば市にて第 82 回日本公衆衛生学会総会が開催され、公衆衛生学の第一線で活躍する専門家や研究者たちが一堂に会し、活発な情報共有と議論の機会となりました。その中で私たち日本 WHO 協会は、後援企画として、11 月 1 日に行われた自由集会プログラム「公衆衛生に国境はない～ Beyond SDGs としてのプラネタリーヘルス～」を開催しました。

日本公衆衛生学会での自由集会「公衆衛生に国境はない」は 1999 年からほぼ毎年、毎回テーマを変えて開催されており、今回で 19 回目となりました。過去には HIV などの感染症や、やさしい日本語など、時宜にかなったテーマのもとで開催してきましたが、今回は、近年注目を浴びつつある『プラネタリーヘルス』をテーマとしました。

プラネタリーヘルスとは、人と自然や地球システムとの関連に注目し、そのバランスが取れた長期的に持続可能な社会や環境を目指す考え方です。一方、持続可能な開発目標（SDGs）の 17 の目標達成においては、目標間に対立が生じることが指摘されています。関西グローバルヘルスの集いや世界保健デーでも、テーマとして取り上げたことがありますが、地球環境の持続可能な調和のためにはどうあるべきか、を考えるべき重要な時期なのです。

話題提供者として、渡辺知保先生（長崎大学大学院プラネタリーヘルス学環・教授）と橋爪真弘先生（東京大学大学院医学系研究科国際保健政策学・教授）をお迎えし、プラネタリーヘルスの視点から公衆衛生の未来について考える貴重な機会となりました。司会・ファシリテーターとして、日本 WHO 協会の中村安秀理事長と私（島津）が登壇し、約 30 人が会場・オンラインで参加してくださりました。そのほか、世話人として大西眞由美先生（長崎大学生命医科学域・教授）、仲佐保先生（シェア＝国際保健協力市民の会・合同代表）、後藤あや先生（福島県立医科大学総合科学教育研究センター・教授）、堀内清華先生（山梨大学大学院総合研究部医学域社会医学講座・特任助教）が運営を務められました。

なお、配布された抄録集内を検索してみたのですが、この学会期間中の全 1,438 演題のうち、“プラネタリーヘルス” をテーマとした演題は、私たちの自由集会ただ一つでした。これから公衆衛生学会でプラネタリーヘルスに関する活発な議論が行われる着火剤のような役割になったのではないか、と感じています。

渡辺知保先生の講演

渡辺先生は、プラネタリーバウンダリーに焦点を当て、地球環境が危機的状況にあることを説明されました。現時点で、6 つ（全 9 つ）のプラネタリーバウンダリーを超えており、このまま何もしなければ、平均気温が 30℃以上の地域が、2070 年には地球全体の 20% を超えてしまう、と警鐘を鳴らしました。また、従来の公衆衛生学は、経済と社会の関係を評価するものでしたが、それにさらに、人間を含めた生態系のことも考慮に入れて定量的な分析を行うことが、プラネタリーヘルス的考えにつながるのではないかと解説されました。今回の公衆衛生学会には、医師や看護師・保健師といった医療従事者だけでなく、行政職員や IT エンジニアなど、多種多様な職種の人が集まりました。これらの異分野の方々との交流を以て、超学際的（transdisciplinary）な研究を行っていく必要を実感しました。

橋爪真弘先生の講演

橋爪先生は、保健医療分野での温室効果ガスの排出に焦点を当て、解説をされました。保健医療分野での温室効果ガスは、世界全体の約 6.4% をも占めており、この削減が求められています。医療分野の中でも特に、入院医療がその 4 分の 1 もの温室効果ガスを排出しているとのことで、入院患者さんに対して過剰なケアをしていないかどうか、我々医療者一人一人が気を付けていく必要がありそうです。欧米では保健医療分野での低炭素システムの実現に向けて動くための枠組みがあるそうですが、日本はこれに参画しておらず、今後の対応が迫られています。

参加者との ディスカッション

会場には、医療をバックグラウンドにされている方が多く、脱炭素と医療業界の発展の両立について、質問があり、双方向での活発な議論が生じました。医療従事者主体での脱炭素を進めていくための仕組みづくりや、具体的な方法について、特に質問が挙がりました。保健医療分野での脱炭素の推進は、個々人ではなく、医療従事者全体で取り組むべきものですが、まだ日本には具体的な取り決めはありません。経済界では、気候変動への取り組みについての開示を企業に求めるもの (TCFD) などがありますが、これを保健医療分野にも適応できるようなものにしていく必要がありそうです。また、脱炭素のために、必要な検査・設備投資を断念するのではなく、より環境に配慮した素材に注目したり、検査・治療の無駄をなくす努力をしたりすることが、保健医療分野での脱炭素につながるのではないか、そのために、我々は一人一人が地球規模でものごとを見る視点を持つことが重要だと考えさせられました。

まとめ

「公衆衛生に国境はない～ Beyond SDGs としてのプラネタリーヘルス～」プログラムは、異なる専門分野の融合と、地球規模での協力の重要性を再確認させるものでした。渡辺先生と橋爪先生の洞察に満ちた講演は、参加者たちに新たな視点を提供し、今後の公衆衛生の方向性についての考察を呼び起こしました。この自由集会プログラムは、公衆衛生の未来を切り拓く重要な一歩であり、参加者全員にとって貴重な体験となったと思います。

自由集会のチラシ